第158回 鶴見大学図書館 貴重書展

中世の歌業

―勅撰集◇実朝◇百人一首

入場無料

令和5年7月15日㊏～8月25日㊎ 於 鶴見大学図書館1階エントランスホール

●7月15日～8月2日：8時50分～21時（㊏18時）＊海の日〈7月17日〉：8時50分～21時

●8月3日～8月25日：8時50分～18時（㊏休館）＊日曜・祝日・大学休業日（8月12日～8月19日）休館

＊学外の方も展示をご覧になれます。入館時はカウンターにお声がけください。入口のゲート横に呼び出しボタンがあります。

＊開館時間が変更となる場合がありますので、ご来館の際は図書館ホームページをご確認ください。

❖主な展示品

『対大己五夏闍梨法』断簡（道正庵切）／『千載和歌集』断簡（日野切）・『明月記』断簡

『新古今和歌集』伝源実朝筆・存上巻／『新古今和歌集』鎌倉後期写・仙台侯旧蔵

『新古今和歌集』『続古今和歌集』『続拾遺和歌集』写字台文庫旧蔵・久保田淳氏寄贈

『金槐和歌集』尾崎雅嘉写・斎藤茂吉旧蔵／永井路子氏自筆原稿「実朝暗殺」

『小倉百人一首』室町後期写・伝鳥飼宗清筆／伝頓阿著『百人一首貞信抄』

鶴見大学図書館 HP https://www.tsurumi-u.ac.jp/site/library-official/ https://twitter.com/tsurumiuniv_lib

［交通］ＪＲ鶴見駅より徒歩 10 分・京急鶴見駅より徒歩 15 分

ご挨拶

今年、日本文学科は創設 60 周年を迎えました。7 月 22 日の日本文学会では、久保田淳氏（東京大学名誉教授・文化勲章受章）と渡部泰明氏（国文学研究資料館館長）をお迎えし、中世和歌をテーマに、ご講演いただきます。それにあわせ、『新古今和歌集』をはじめとする鎌倉時代前期の勅撰和歌集、鎌倉幕府 3 代将軍である源実朝の家集『金槐和歌集』、また『百人一首』とそれに関する貴重書を中心に、「中世の歌業—勅撰集・実朝・百人一首—」と題する展示をいたします。

『新古今和歌集』は鎌倉初期に成立した 8 番目の勅撰和歌集で、『万葉集』や『古今和歌集』と並び、和歌史に重要な位置を占めています。近年、源実朝を伝称筆者とする 1 本、および鎌倉後期に写されたと見られる 1 本が本学図書館に所蔵されました。それぞれ、これまで広く知られてはいなかった資料と思われます。残念ながらどちらも一部が欠けていますが、それでも成立まもないころの『新古今和歌集』の姿がある程度まとまった形で見られるのは極めて貴重でしょう。

このほかにも、道元・藤原俊成・藤原定家の自筆の古筆切、室町時代の書写と思われる勅撰和歌集や百人一首、また写字台文庫すなわち本願寺旧蔵の勅撰和歌集、そして系統の異なる 2 種類の『金槐和歌集』の写本、さらに歴史小説家として有名な永井路子氏の自筆原稿などを展示しています。

60 年間、さまざまなご支援を賜りながら、充実させてきたコレクションの数々をご高覧ください。

日本文学科　田口暢之

目　次

I　新古今和歌集とその時代・・・・・・・・・2

01 対大己五夏闍梨法（断簡）　＊道正庵切
　道元自筆　寛元 2 年（1244）写
02 千載和歌集（断簡）　＊日野切
　藤原俊成自筆　文治 4 年（1188）頃写
03 明月記（断簡）
　藤原定家自筆　〔鎌倉初期〕写
04 新古今和歌集　〔江戸前期〕写
　＊写字台文庫旧蔵　＊久保田淳氏寄贈
05 新古今和歌集（巻上存）　〔鎌倉中期〕写
　＊伝源実朝筆
06 新古今和歌集（残欠）　〔鎌倉後期〕写
　＊伊達家旧蔵
07 新古今和歌集　〔室町前期〕写
　＊上杉鷹山手沢本

II　鎌倉前期の勅撰和歌集・・・・・・・・・5

08 新勅撰和歌集　〔室町後期〕写
　伝飛鳥井雅康筆
09 続後撰和歌集　〔室町後期〕写
　伝三条西実隆筆
10 続古今和歌集　〔江戸中期〕写
　＊久保田淳氏寄贈
11 続古今和歌集　〔江戸前期〕写
　＊写字台文庫旧蔵　＊久保田淳氏寄贈
12 続拾遺和歌集　〔江戸前期〕写
　＊写字台文庫旧蔵　＊久保田淳氏寄贈
13 新後撰和歌集　〔江戸前期〕写
　＊写字台文庫旧蔵

Ⅲ　金槐和歌集・・・・・・・・・・・・・・8

14 金槐和歌集　〔江戸後期〕写
　伝尾崎雅嘉筆　＊斎藤茂吉旧蔵
15 金槐和歌集　〔江戸中期〕写
　＊貞享 4 年（1687）版本系
16 金槐和歌集　〔江戸中期〕写　＊定家所伝本系

Ⅳ　百人一首と古注釈・・・・・・・・・・9

17 百人一首　〔室町後期〕写　伝鳥飼宗清筆
18 百人一首かるた　〔江戸中期〕写
19 貞信抄　〔江戸中期〕写　＊個人蔵
20 愚問賢注抄　玉翁筆　享保 8 年（1723）写
　＊紅梅文庫旧蔵

参考 1 新古今和歌集（断簡）　＊桂切
　伝後京極良経筆　〔鎌倉中期〕写
参考 2 源氏物語　〔江戸前・中期〕写
　＊久保田淳氏寄贈
参考 3 実朝暗殺　永井路子氏自筆原稿

凡例・展示担当・・・・・・・・・・・・・・13

Ⅰ　新古今和歌集とその時代

01　対大己五夏闍梨法（断簡）１葉（額装）　道元自筆　寛元２年（1244）写　＊道正庵切

登録番号、1056159。5 行（6 行目は空白）。縦 23.2cm×横 12.7cm。本学図書館に収められるツレの 1 葉（登録番号、0317196）は縦 23.9cm×横 14.4cm なので、化粧裁ちされていることが分かる。料紙、厚手の斐紙。毎半葉 6 行の白界が施される。字高、約 17.8cm。池田利夫「道元禅師自筆『対大己法』断簡再び新出―原本の書誌的全容ほぼ判明―」（曹洞宗報 705、1994 年 5 月）によると、元来は共紙表紙、全 10 丁の粘葉装であったと推測され、3 丁表の 1 行が国宝手鑑『翰墨城』に、4 丁表が国宝手鑑『藻塩草』に、4 丁裏が本学図書館蔵のツレ、6 丁表の 2 行が手鑑『都地久連』に、8 丁裏が当該断簡、9 丁裏と 10 丁表が国宝手鑑『見ぬ世の友』に残存する。

「大己」は年長者の意で、「五夏闍梨」は 5 年以上の修行を積んだ者。入山したばかりの修行僧に向けて先輩僧侶への礼法を 62 条にわたり、道元（1200～53）が説いたもの。掲出したのはその終わりの部分にあたる。『見ぬ世の友』の断簡には「于時日本寛元二年甲辰三月二十一日」、「道元（花押）」と記されており、道元の数少ない真筆資料であることが分かる。なお、「道正庵切」の呼称は安政 5 年（1858）刊の『増補新撰古筆名葉集』に見え、道元の入宋にも従った俗弟子の木下道正の家に伝わったという伝称によるが、真偽は不明。

池田氏は前掲論文で「厳しい修行と深い思索に裏付けられた鋭利、透徹、圭角に富む吸い込まれるような気迫の漲りが、同時代人で歌道を極めた藤原俊成の強靭な筆法を連想させ、圧倒させられるものがあった」と述べている。俊成の筆跡は 02 参照。

02　千載和歌集（断簡）１葉（軸装）　藤原俊成自筆　文治４年（1188）頃写　＊日野切

登録番号、0357746。巻 19 釈教の 1235～7 番歌。縦 21.5cm×横 14.8cm。料紙、斐紙。10 行。和歌 2 行（上句末で改行。詞書 3 字下げ）。字高、約 20.4cm。二重箱入り。極札、布目地銀泥雲霞引きの札に「五條三位俊成卿〈おとろかぬ〉（琴／山）」（縦 14.5cm×横 2.1cm）。内箱の蓋の裏に糊付けされており、裏は見えない。「俊成卿日野切極札　〈古筆／了珉〉」という包紙あり。内箱の蓋の表には「日野切〈おとろかぬ〉」と墨書、裏に「藤原俊成卿筆　義（花押）」という吉澤義則（1876～1954。京都帝国大学名誉教授・国語国文学者）による識語あり。また、外箱の蓋の表に「俊成卿筆　日野きれ」と刻まれる。

『千載和歌集』は 7 番目の勅撰和歌集。序によると文治 3 年（1187）に藤原俊成（1114～1204）が撰進。日野切はその手控本と見られ、巻 10 以降の半分ほどが現存。撰者俊成の自筆資料として貴重。

なお、2 首目初句「あかつき」の 3 字目が見えないのは料紙の欠損によるもの。『新編国歌大観』は 3 首目の作者名「式子内親王家中将」とするが、日野切では「式子内親王の中将」となっている。

03　明月記（断簡）１葉（軸装）　藤原定家自筆　〔鎌倉初期〕写

登録番号、1059673。建保元年（1213）5 月 24 日条の中間部分。縦 27.8cm×横 14.4cm。料紙、楮紙（罫線なし）。9 行。字高、約 26.7cm。藤原定家（1162～1241）は 02 にあげた俊成の男。8 番目の勅撰集『新古今集』（04～07 参照）撰者の 1 人、9 番目の勅撰集『新勅撰集』（08 参照）の撰者。50 年以上にわたって日記『明月記』を書き、自筆本が冷泉家にまとまって伝わるほか、自筆断簡が諸所に収められる。本学図書館にはほかに 2 葉の自筆断簡がある（登録番号、1059674～5）。

掲出したのは『冷泉家時雨亭叢書　別巻 3　翻刻明月記 2』の底本にも採用されたもので、同書によると直前の部分のツレは大垣博氏蔵。直後の断簡は発見されていないようである。定家 53 歳のときの記事。順徳天皇夫妻が「本宮」（閑院内裏）に還ったこと、翌日は「最勝講始」で後鳥羽上皇が水無瀬に御幸すること、来月の祇王御霊会の「馬長」の列に為家が加わることには道理がないことなどを記す。6 行目の「聟」はなぞり書きしたような痕跡があり、同じ行の「入陶朱之撰」は墨色が他と異なるようで、ともに断簡にした際の補筆か。

04　新古今和歌集　綴葉装２帖　〔江戸前期〕写　＊写字台文庫旧蔵　＊久保田淳氏寄贈

登録番号、1402162～3。丁子吹梨地に金銀の縦線を引いた表紙。縦 25.0cm×横 17.7cm。外題、表紙左肩の金泥下絵内曇題簽（縦 15.7cm×横 3.3cm）に「新古今和歌集　上（～下）」と書写（飛鳥井雅章筆か）。内題、「新古今和歌集序（～巻第二十）」。見返し、本文共紙。料紙、厚手の布目地斐紙。巻上は 8 括（第 7 括までは 10 枚。第 8 括は 7 枚。第 5 括は最初の半葉が切り取られているが、本文は連続していて問題なし。最初と最後の 1 丁は表紙に綴じ込まれる）、巻下は 7 括（第 6 括まで 10 枚、第 7 括は 9 枚。最初の 1 丁のみ表紙に綴じ込まれる）。遊紙、巻上は前 1 丁、後 2 丁、巻下は前後各 1 丁。毎半葉、真名序・仮名序は 9 行、本文は 10 行。和歌 1 行（詞書 3 字下げ）。字高、真名序は約 20.8cm、仮名序は約 21.0cm、本文は約 21.2cm。識語、巻下末に「〈官本云〉文明十二暦初秋上旬候依　仰令／書写遂数ヶ度之校合畢／（一行空白）／権中納言藤原雅康」、半葉空白、「右集以黄門入道宋世遺墨之本／励謄写之功畢件本以撰者之／真跡〈并〉数多之本所被比校／之官本写之之由被書于紙尾／尤希有之証本也／亜槐藤」（いずれも本文同筆）。「撰者」自筆の本を多くの本と校合した「官本」を飛鳥井雅康（1436～1509。法名宋世）が書写し、それを謄写したものという。蔵書印、各帖、前見返し右下と 1 オ左下に「写字台／之蔵書」（朱・陽・楕円・単。縦 3.9cm×横 2.2cm。見返しは捺印した紙片を糊付け）、1 ウ右下に「楽以軒／珍襲」（朱・陽・方・単。縦 3.2cm×横 1.7cm）。本文末尾に「？／岱」（印記は画像参照。朱・陰・方・無。縦 1.5cm×横 1.5cm）。各帖とも 1 ウから本文を書写し、不審紙あり。

宮内庁書陵部には飛鳥井雅章（1611～79）一筆の二十一代集が所蔵されており、当該資料は雅章監督のもと、装訂をも含めてそれを模した本と見られる。写字台は本願寺宗主の居室の意で、その蔵書を写字台文庫と称する。室町時代ごろから仏書はもとより、歴史や文学、芸術など幅広いジャンルにわたるコレクションが形成された。明治時代に龍谷大学にまとまって寄贈されたが、当該資料のように民間に出た本もある。

『新古今集』の成立過程は複雑である。まず藤原定家ら 5 人の撰者による撰歌が行われた。各歌がどの撰者によって撰ばれたのかを示す注記（撰者名注記）が付されている伝本もある。当該資料は巻上にのみ撰者名注記（36 番歌までは各撰者名の漢字 1 字、37 番歌以降はその略号）がある。次いで後鳥羽院自身が精撰し、その後それを部類して、元久 2 年（1205）の竟宴で一応の完成を見る。しかし、実際にはその後も「切継ぎ」と呼ばれる歌の差替えが承元 3～4 年（1209～10）ころまで続けられた。現存する伝本は切継ぎ時代のものがほとんどで、伝本により歌の出入りや配列の相違などがある。そのうえ、後鳥羽院は承久の変によって隠岐に配流された後にも、『新古今和歌集』をさらに精撰し、380 首ほどを除棄した。これを隠岐本という。切継ぎ時代の伝本であっても、隠岐本に残された歌ないし除かれた歌に合点などの記号を付すものがある。ただし、撰者名注記も隠岐本合点も伝本によって異同があり、問題をさらに複雑にしている。

掲出したのは秋上 295～302 作者名の部分。丁をまたぐところ「太神宮にたてまつりし秋哥の中に／太上天皇／朝露のをかのかや原山かぜにみだれて物は秋ぞかなしき」と記される 1984 番歌は切出歌で、伝本によって記されていなかったり、「被出了」（出だされ了んぬ）と注記されていたりする。当該資料はほかに切出歌をもたないが、巻下には巻 18 雑下に「太神宮歌合に　太上天皇／大空にちぎるおもひのとしもへぬ／月日もうけよゆくすゑのそら」（1996）という正保 4 年（1647）刊二十一代集本に見える異本歌が紙片に記されて挟み込まれ、巻 19 神祇には「奉幣使に住吉に参りてむかしすみける／とまりのあれたりけるを読侍ける　津守有基／住吉とおもひし宿は荒にけり神のしるしを待とせしまに」（1994）という切出歌が貼り付けられている。ともに本文別筆か。

また、撰者名注記に注目すると、右端の 295「しきたへの」は「有（家）、（家）隆」と記されるが、伝本によっては通具も加えられている。通具の撰者名注記は伝本によって、その有無や記載の位置が異なり、1 つの謎となっている。当該資料は通具の注記を持たないグループに属す。左から 2 首目の 300「あはれいかに」の著名歌には撰者名注記がないが、伝本によっては「有（家）、定（家）、（家）隆、雅（経）」となっている。後藤重郎『新古今和歌集研究』（風間書房、2004 年）の「撰者名注記一覧表」によると、295 と 300 の撰者名注記が当該資料と同じ伝本として、谷山茂氏蔵頓阿行房両筆本・東洋文庫蔵古活字本・宮内庁書陵部蔵八代集本がある。

なお、当該資料は久保田淳『新古今和歌集全注釈』（角川学芸出版、2011～2 年）の校合本の 1 つ。

05　新古今和歌集　綴葉装１帖（巻上存）　〔鎌倉中期〕写　＊伝源実朝筆

登録番号、1410820。表紙なし。縦 23.0cm×横 15.5cm。内題、「新古今和謌集序（～巻第九）」（巻十は内題の部分が欠）。見返し、前は欠、後は布目地金紙に銀泥で山を描き、銀切箔や野毛を散らす。料紙、斐紙。11 括（それぞれの枚数は 8（最後の 1 丁なし）、8、8、9、7、9（最後の 1 丁なし）、7、9（最初の 1 丁なし）、7、9（最後の 1 丁なし）、9（最初の 2 丁なし））。1 詞書～11 作者、299 詞書～305 上句、535 詞書～545 詞書、829 詞書～835 歌、895 歌～984 作者、欠。毎半葉、真名序と仮名序は 7 行、本文は 11 行。和歌 2 行（上句末で改行。詞書は 2 字下げ）。字高、真名序と仮名序は約 16.3cm、本文は約 16.5cm。奥書なし。蔵書印なし。全体に朱の書入れ（作者の勘物・撰者名注記・隠岐本所載歌への合点）があるが、本文とは別筆であろう。二重箱入り。内箱は桐で、蓋に「鎌倉右大臣實朝真跡／新古今集／西邨（印）」と墨書。外箱は茶色漆箱。

当該資料は巻上のみの残欠本で欠脱も少なくないが、書写年代がかなり古いうえに、切出歌を持たず、撰者名注記と隠岐本所載歌への合点（所載歌へ合点をつける方が、除棄歌へ合点をつけるよりも古い形式と見られる）をもつ点で貴重である。

掲出したのは秋上 361～366 作者名の部分。いわゆる「三夕の歌」が並ぶ。寂蓮・西行の歌には朱合点が付いているので、隠岐本（04 参照）にも載せられていたことを示し、反対に合点を持たない定家の歌は隠岐本で除棄されたことを示す。しかし、西行の歌には朱で「院御本此哥被出之」（院御本、此の歌、之を出ださる）、定家の歌にも朱で「院御本此哥不被出之」（院御本、此の歌、之を出だされず）と注記される。つまり、「院御本」では西行の歌がなく、定家の歌が残されていたという注である。後藤重郎『新古今和歌集研究』（風間書房、2004 年）の「隠岐本符号一覧表」によると、当該資料のいう「院御本」に合致する伝本はなく、定家の歌を除棄する本が多い。

また、撰者名注記（04 参照）は左端の「おもふこと」の歌に「衛（＝通具）・定（家）」と記され、当該資料は通具の撰者名注記をもつグループに属す。ただし、この撰者名注記には伝本によって異同があり、注記ナシあるいは定家だけの本も多い。当該資料のように通具と定家の両方を持つのは、国文学研究資料館蔵初雁文庫旧蔵本などの数本である。

ところで、当該資料には春下 147～151 番歌の記された丁に、以下の紙片が挟み込まれている。

〈被出之〉　　躬恒

〈衛〉なみのうへにほのにみえつゝゆく舟はうら吹風のしるべなりけり

作者名と歌には切出を示す「^」が付けられている。挟み込まれた位置は伝来の過程で誤られたようで、実際は羈旅の切出歌（1989 番歌）にあたる。本文とは別筆であるが、朱の書入れとは同筆と見られる。注意すべきは「衛」（通具）の撰者名注記で、前掲『新古今和歌集研究』の「撰者名注記一覧表」によると、当該歌の撰者名はこれまで知られていなかった。後人の筆であっても、通具撰の情報が得られたのは貴重であろう。

06　新古今和歌集　綴葉装１帖（巻頭・巻末欠）　〔鎌倉後期〕写　＊伊達家旧蔵

登録番号、1420269。真名序欠。仮名序「しかのみならずたかき屋に」（ただし 1 オは紙面擦過により判読困難）から 1937 番作者名まで存。表紙なし。縦 25.8cm×横 18.3cm。内題「新古今和哥集巻第一（～二十）」。料紙、楮紙。12 括（枚数、8（最初の 4 枚欠）・8・7・9・7・7・7・7・7・8・8・8）。毎半葉、仮名序 12 行、本文 12 行（ただし、終わりの 2 括は 13～16 行）。和歌 1 行（詞書 2 字下げ）。字高、仮名序約 21.8cm、本文約 22.0cm。奥書なし。蔵書印なし。黒の漆箱入（箱書なし。本よりもかなり大きく、転用された箱か）。付属の包紙に「仙台侯旧蔵本」、「鎌倉時代鈔本也」とあり。

残存状況は以下のとおり。691 詞書～701 詞書、824 詞書～831 歌、950 歌～969 歌、1118 詞書～1139 作者、1283 詞書～1293 作者、1670 歌～1738 作者、1937 歌～1978 歌、欠（欠丁などの物理的要因による）。816 詞書の途中から目移りで 817 詞書となり 816 歌、欠。204・935・1026 は詞書・作者・歌、欠。387・386、602・601、755・754 の順。445・446 は歌順と詞書と作者に問題、456・455・457、513・512 の順で作者に問題。1930 詞書中の「ちる花に」の歌を改行して、独立した歌として書く。また、1569 の次に「題不知　能因法師」として「かくしつゝふけゆく秋も老ぬればしかすがにこそかなしかりけれ」とあるのは 548 の重出。

とくに注意されるのは、切出歌（04 参照）の 1979・1980・1984・1986・1988・1989・1990・1991・1992・1993・1994、異本歌の 1999（紅梅文庫旧蔵八代集本に所収）・2001（同上）が含まれていることであろう。他本によると、1979 には「承元四年九月止之」、1986 には「入金葉集之由云云」、1991 には

「入拾遺集之由、権中納言源朝臣申之」と注記されている場合がある。そのため、1979 を持つ当該資料は承元 4 年（1210）9 月以前の姿を留めていると見られる。また、勅撰集は同一の歌を重複して採らないのが原則であるため、『金葉集』（三奏本・秋・220・恵慶）に入集した 1986 番歌や、『拾遺集』（雑賀・1169・貫之）と『金葉集』（初度本・賀・458）に入集した 1991 番歌が含まれているのは未精撰の状態を窺わせる。同時に、それぞれが『金葉集』二度本や『拾遺抄』には入っていない点も興味深い。

掲出したのは秋下 441～449 作者の部分。まず右から 2 首目は前述の恵慶歌で『金葉集』と重複したため、後に切り出されることになる。

丁が変わって 2・3 首目の慈円と俊忠の歌には問題がある。『新編国歌大観』によると、正しくは、

千五百番歌合に　　前大僧正慈円

なくしかの声にめざめてしのぶかなみはてぬ夢の秋の思ひを

家に歌合し侍りけるに、鹿をよめる　　権中納言俊忠

夜もすがら妻どふしかの鳴くなへにこはぎが原の露ぞこぼるる

とあるべきところ、歌のみが入れ替わっている。詞書も当初は前の詞書「百首歌よみ侍けるに」を誤って写したらしく、「首」を擦り消し「番」と上書きし、「百」の前に「千」と書き足し、さらに「五」を補入して「百首」を「千五百番」と書き換えるが、「千五百番歌よみ侍けるに」と不自然な詞書になっている。なお、「夜もすがら」の歌の下句は『新編国歌大観』では「小萩が原に露ぞこぼるる」であるが、当該資料は「小萩がもとに露ぞ乱るる」とする。こうした異同が全体的に目立つ点も、当該資料の 1 つの特徴である。

07　新古今和歌集　袋綴 4 冊　〔室町前期〕写　＊上杉鷹山手沢本

登録番号、1145412～3、1148603～4。憲法色羅表紙。縦 28.3cm×横 20.2cm。虫損補修の際に周囲を切られたため、本来はもう一回り大きい本。外題、表紙左肩の紫色絹題簽（縦 20.8cm×横 3.4cm）に「古写新古今和歌集　春（～冬）」と本文別筆で書写。内題、現在の扉が元来は共紙表紙であったようで、左上に「新古今和歌集巻第一（六・十一・十六）」と書写（本文・外題いずれとも別筆）。見返し、後補の楮紙。料紙、楮紙。毎半葉、真名序 10 行、仮名序と本文 12 行。和歌 1 行（詞書 2 字下げ）。字高、約 26.2cm。奥書なし。蔵書印、1 オ右下に「伊佐早謙／古書之宝」（朱・陽・方・単。縦 2.2cm×横 1.3cm）、その下に「稽古堂蔵書」（朱・陽・方・単。縦 6.0cm×横 1.3cm）。帙に上杉鷹山（1751～1822）手沢本である旨の伊佐早謙（1857～1930。郷土史家。米沢図書館館長）による識語あり。撰者名注記や隠岐本合点はないが、切出歌が 8 首ある（撰者名注記などについては 04 参照）。

掲出したのは夏の 240～250 作者の部分。6 首目の「増基法師／時鳥はなたちばなのかばかりになくやむかしのなごりなるらん」（1983）は切出歌。

Ⅱ　鎌倉前期の勅撰和歌集

08　新勅撰和歌集　綴葉装 2 帖　〔室町後期〕写　＊伝飛鳥井雅康筆

登録番号、1311543～4。深緑地唐花唐草文様金襴表紙。縦 25.6cm×横 17.3cm。表紙左肩の銀泥霞引内曇題簽（縦 14.3cm×横 2.8cm）に本文別筆で「新勅撰和歌集　〈上〉（～下）」と墨書。内題、「新勅撰和歌集（～巻第二十）」。見返し、金泥雲霞引き金切箔散らしに金銀泥で若松と竹を描く。料紙、斐紙。上は 4 括（枚数は 11・11・11・13）、下は 5 括（枚数は 12〈最初に別の 3 枚を糊付け〉・12・11・10・5）。遊紙、上は前後各 1 丁、下は前 1 丁、後なし。毎半葉、序 9 行、本文 10 行。和歌 1 行（詞書 3 字下げ）。字高、約 22.2cm。奥書、巻上末「本書云／眼盲手疼雖非右筆之器／依假撰者之名字欲備後輩／之証本而已」（本文同筆）。撰者となった定家が後人のために証本を残そうと思ったの意。巻下末「這新勅撰和歌集者吾先／雅康卿之真蹟不容疑異／者也応或人之需加一語于後云／宝永三年十一月下旬　雅豊」（本文別筆）。飛鳥井雅康（1436～1509）筆の本であることを飛鳥井雅豊（1664～1712）が証明した識語。黒漆の二重箱入り。外箱は蓋上部に「新勅撰／和哥集」と朱書。内箱は蓋上部に「新勅撰和歌集　飛鳥井雅康卿筆　全部」と金泥で記した金蒔絵箱。折紙 2 通が付属。ともに雅豊が識語を書いたのと同じ宝永 3 年（1706）のもので、3 代古筆了仲による。本文は除棄歌を含まない精撰本系。

『新勅撰集』は 9 番目の勅撰集で、後堀河院（1212～1234）の下命、藤原定家撰。完成間近に後堀河

院が崩御したため、定家は草稿を自宅の庭で焼いてしまうが、関白九条道家（1193～1252）が別の草稿を見付け、撰集作業は継続する。その後、道家の指示で 100 首ほど（承久の変に関与した後鳥羽院や順徳院などの歌と推定される）が除棄され、文暦 2 年（1235）に清書本が完成した。

掲出したのは雑歌二の巻軸部分。鎌倉幕府 3 代将軍の源実朝の歌「山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも」で締めくくられる。この歌は実朝が定家へ贈ったと見られる『金槐集』（16 参照）の最後を飾った歌でもある。『新勅撰集』では詞書が「ひとりおもひをのべ侍けるうた」となっているが、『金槐集』では「太上天皇御書下預時歌」となっている。

09　続後撰和歌集　綴葉装 2 帖　〔室町後期〕写　＊伝三条西実隆筆

登録番号、1422131～2。上下とも表は萌黄色地に四角と花菱を組み合わせた金襴表紙、裏は浅緑地牡丹唐草文様金襴表紙。縦 25.0cm×横 15.8cm。外題、表紙左肩の朱色竜紋題簽（縦 14.7cm×横 3.0cm）に「續後撰和歌集〈上〉（～〈下〉）」と本文別筆で書写。内題、「續後撰和歌集巻第一（～二十）」（本文同筆）。見返し、紗綾型押金紙。料紙、斐紙。上は 5 括（枚数、10・10・10・10・13。最後の 1 丁のみ表紙に綴じ込む）、下は 6 括（枚数、10・10・10・9・11・11。最初と最後の 1 丁を表紙に綴じ込む）。遊紙、上は前 1 丁、後なし。下は前後とも 1 丁。毎半葉 8 行。和歌 1 行（詞書 2 字下げ）。字高、約 21.3cm。奥書、上帖末に建長 7 年（1255）の撰者為家の書写・校合・加証本奥書、文永 6 年（1269）相伝本奥書、正安元年（1299）の為相の書写・校合奥書、さらに三条西実隆の校合・加証本奥書あり。下帖末には建長 8 年（1256）の為家の校合本奥書、「集二十巻」の歌数識語、延文 2 年（1357）の校合本奥書、三条西実隆の校合本奥書あり。蔵書印なし。桐箱入。蓋に「権中納言實隆卿筆／續後撰和歌集　二冊」と貼紙（本文別筆）、その右に「實隆卿　二冊／續後撰和歌集」の貼紙（本文別筆）、側面に「亀第百七拾参号」の貼紙（本文別筆。朱印の抹消痕あり）。

『続後撰集』は 10 番目の勅撰集で、後嵯峨院（1220～1272）の下命、定家男の為家（1198～1275）撰。建長 3 年（1251）奏覧。掲出したのは賀部の 1358～1364 詞書の部分。2 首目の実朝の歌は『金槐集』によると二所詣をしたときの作。4 首目の「寄月祝」題は「寄月」か「月前」かで「月」の詠み方が異なると論じられる歌題（20 参照）。

10　続古今和歌集　綴葉装 2 帖　〔江戸中期〕写　＊久保田淳氏寄贈

登録番号、1402166～7。表紙、黒地に割小菱と扇を金糸で織り出した緞子。縦 25.3cm×横 18.2cm。外題、表紙中央の金切箔雲霞引斐紙題簽（縦 16.5cm×横 3.0cm）に「續古今和歌集　上（～下）」と本文別筆で書写。内題、「續古今和歌集序（～巻第廿）」（本文同筆）。見返し、布目金切箔散らし。料紙、斐紙。上 7 括（枚数は 9・11・12・11・13・11・6）、下は 6 括（枚数は 10・10・12・12・11・10）、上下とも最初と最後の 1 丁は表紙に綴じ込まれる。遊紙、上は前 1 丁、後 4 丁、下は前 1 丁、後 3 丁。毎半葉、真名序 8 行、仮名序 9 行、本文 10 行。和歌 1 行（詞書 2 字下げ）。字高、真名序は約 20.5cm、仮名序は約 21.0cm、本文は約 20.7cm。奥書なし。蔵書印なし。不審紙あり。帙に「文仁親王、石井行康卿」とボールペンで記されたメモが添付される。文仁親王（1680～1711）は霊元天皇皇子、石井行康（1673～1729）も同時代の公卿。

『続古今集』は 11 番目の勅撰集で、『続後撰集』と同じく後嵯峨院の下命。当初、藤原為家のみが撰者となったが、後に藤原基家・家良・行家・光俊（法名真観）が追加された。家良はまもなく没し、残りの 4 人で撰集作業が進められ、文永 2 年（1265）奏覧、竟宴が行われた。ただし、為家は真観らが追加されたことに不満で、評定でもほとんど意見を述べなかったという（井蛙抄）。伝本は精撰本系、未精撰本系、中間本系に大別できる。佐藤恒雄『藤原為家研究』（笠間書院、2008 年）第 3 章第 6 節「石橋本続古今和歌集考」（初出 1995 年 8 月）の伝本分類の基準によると、当該資料は十三代集版本などの未精撰本系に近い。

掲出したのは夏部 268～274 作者の部分。左から 2 首目「さきにけりをちかた人にことゝひて名をしりそめし夕がほの花」は『源氏物語』夕顔巻（参考 2 参照）を踏まえた歌。次の「ふる道に我やまよはむいにしへのゝ中の草はしげりあひけり」という人麿の歌は十三代集版本などに見える異本歌。

11　続古今和歌集　綴葉装２帖　〔江戸前期〕写　＊写字台文庫旧蔵　＊久保田淳氏寄贈

登録番号、1404062～3。丁子吹梨地に金銀の縦線を引いた表紙。縦 25.0cm×横 17.9cm。外題、表紙左肩の金泥下絵内曇題簽（縦 15.7cm×横 3.3cm）に「續古今和歌集　上（下）」（飛鳥井雅章筆か）と書写。内題、「續古今和歌集　巻第一（～巻第二十）」。見返し、共紙。料紙、厚手の布目地斐紙。上は 8 括（10 枚×7。最後のみ 9 枚）、下は 7 括（10 枚×5、終わりの 2 括は 9 枚）。上下とも最初と最後の 1 丁を見返しとする。遊紙、上は前 1 丁、後 2 丁。下は前 1 丁、後 1 丁。毎半葉、仮名序と本文は 10 行、真名序は 8 行。和歌 1 行（詞書 3 字下げ）。字高、仮名序と本文は約 20.8cm。真名序は約 21.4cm。奥書、「右和哥集一冊者謹蒙／鳳銜不顧左道訕謾馳右筆独／雖遂全部之写功猶致并読之／比校而已于時文明十一載黄鐘上澣／台嶺釈准三后尊応（半葉空白）右一帖以青蓮院准后〈尊応〉被／濡健筆之本写之者也件／本官庫回禄之尅令焼却／訖可惜々々（一行空白）亜槐藤」。本文末尾に本文別筆の朱で「以後光厳院宸翰重而遂校合相違之所以朱付了」とある。たしかに朱の書入れが散見。蔵書印、見返し右下と 1 オ左下に「写字台／之蔵書」（朱・陽・楕円・単。縦 3.9cm×横 2.3cm。見返し右下は捺印した紙片を糊付け）、1 ウ右下に「楽以軒／珍襲」（朱・陽・方・単。縦 3.2cm×横 1.7cm）、 本文末尾に「？？？下書窓」（印記は画像参照。朱・陽・円・単、直径 2.3cm）。不審紙あり。佐藤恒雄『藤原為家研究』（笠間書院、2008 年）第 3 章第 6 節「石橋本続古今和歌集考」（初出 1995 年 8 月）の伝本分類の基準によると、当該資料は十三代集版本などの未精撰本系に近い。

『続古今集』については 10 参照。掲出したのは秋上の 402～410 の部分。左の丁の 1・2 首目「海辺月を　平政村朝臣／風わたるゆらの湊の夕しほに影さしのぼる月のさやけさ」や「浦月を　権大僧都定円／しきたへの床の浦半の浪枕やどるや月のうきねなるらむ」の歌題「海辺」と「浦」の詠み分け方などが議論される（20 参照）。

12　続拾遺和歌集　綴葉装１帖　〔江戸前期〕写　＊写字台文庫旧蔵　＊久保田淳氏寄贈

登録番号、1402164。丁子吹梨地に金銀の縦線を引いた表紙。縦 24.9cm×横 17.8cm。外題、表紙左肩の金泥下絵内曇題簽（縦 15.7cm×横 3.3cm）に「續拾遺和歌集」（飛鳥井雅章筆か）。内題、「續拾遺和歌集巻第一（～第二十）」。見返し、共紙。料紙、厚手の布目地斐紙。10 括（第 9 括のみ 11 枚。ほか 10 枚）。遊紙、前 1 丁、後 2 丁。毎半葉 10 行。和歌 1 行（詞書 3 字下げ）。字高、約 21.0cm。奥書、「〈官本云〉此集依　勅定以御本／書写之数反令校合訖／文明十年六月廿日／法印公助（半葉空白）右所写者　官本也件本者／定法寺僧正〈公助〉依　勅命／励書写之功云々／亜槐藤」。蔵書印、前見返し右下と 1 オ左下に「写字台／之蔵書」（朱・陽・楕円・単。縦 3.9cm×横 2.2cm。見返しは捺印した紙片を糊付け）、1 オ右下に「楽以軒／珍襲」（朱・陽・方・単。縦 3.2cm×横 1.7cm）、奥書末尾「？？？下書窓」（印記は 11 画像参照。朱・陽・円・単。直径 2.4cm）。不審紙あり。

『続拾遺集』は 12 番目の勅撰集で、亀山院（1249～1305）の下命、撰者は為家男の為氏（1222～86）。弘安元年または 2 年（1278・9）に奏覧された。伝本は 3 類に分かれるが、当該資料は宮内庁書陵部蔵飛鳥井雅章筆本と同じく 2 類に属す（04 参照）。掲出したのは雑秋部 648～656 詞書の部分。左から 2 首目「野径雪」題を「かすが野にふりにしよゝの跡とめて雪ふみ分る道をしらばや」と詠むが、「径」という題字の詠み方が議論される（20 参照）。

13　新後撰和歌集　綴葉装１帖　〔江戸前期〕写　＊写字台文庫旧蔵

登録番号、1131186。丁子吹梨地に金銀の縦線を引いた表紙。縦 24.9cm×横 17.7cm。外題、表紙左肩の金泥下絵内曇題簽（縦 15.6cm×横 3.2cm）に「新後撰和歌集」（飛鳥井雅章筆か）。内題「新後撰和歌集巻第一（～二十）」。見返し、共紙。料紙、厚手布目斐紙。11 括（第 7 括 11 枚（前 1 枚切取。内容は連続）、第 10・11 括 8 枚、ほか 10 枚）。最初と最後の 1 枚は見返しとする。遊紙、前 1 丁、後 2 丁。毎半葉 10 行。和歌 1 行（詞書 3 字下げ）。字高、約 20.8cm。奥書、「右依　勅定披数多之旧本加用捨励／書写之微功遂校合者也／文明十三年三月十六日／従二位藤原教国（半葉空白）此新後撰和歌集以滋野井／教国卿自筆之本往々遂／書写之微功訖件本者官／物也（一行空白）亜槐藤」。蔵書印、前見返し右下と 1 オ左下「写字台／之蔵書」（朱・陽・楕円・単。縦 3.8cm×横 2.2cm）、1 ウ右下「楽以軒／珍襲」（朱・陽・方・単。縦 3.2cm×横 1.7cm）、奥書末尾「？？？下書窓」（印記は 11 画像参照。朱・陽・円・単。直径 2.4cm）。

白・青・黄・赤の不審紙あり。写字台文庫本の特徴については 04 も参照。
『新後撰集』は 13 番目の勅撰集で、後宇多院（1267～1324）の下命、撰者は為氏男の為世（1250～1338）。息子の為藤（1275～1324）や弟の定為（1252 頃～1327 以前）らの力も借り、嘉元元年（1303）に奏覧した。掲出したのは賀部 1595～1601。丁をまたいで、後深草院（1243～1304）が 60 歳になった際に「寿命経供養」をしたとき、娘の遊義門院（1270～1307）から銀の杖とともに贈った歌「つくつゑに六十こえ行ことしより千とせのさかのすゑぞ久しき」が記される。なお、09 には藤原俊成の九十の賀の際にも銀の杖を贈った旨の詞書が記されていた。

Ⅲ　金槐和歌集

14　金槐和歌集　袋綴 1 冊　〔江戸後期〕写　＊伝尾崎雅嘉筆　＊斎藤茂吉旧蔵

登録番号、1287638。砥粉色地藍色牡丹唐草文様表紙。縦 23.6cm×横 16.2cm。外題、表紙左肩の白題簽（縦 16.4cm×横 3.4cm）に「金槐集　賀茂真〔淵校本〕」（本文同筆）と書写。内題、「金槐和歌集巻上／春部　鎌倉右大臣実朝家集」（5 オ）、「金槐和歌集巻之中／恋之部」（36 オ）、「金槐和歌集巻下／雑部」（45 ウ）。遊紙、前後各 1 丁。見返し、共紙。料紙、楮紙。毎半葉 11 行。和歌 1 行（詞書、約 5 字下げ）。字高、約 17.9cm。本文末尾に「右之一帖者鎌倉右大臣家集京極中納言〈定家卿〉／門弟此道之達者云々　然最初雖部類在不審／尚之間重而改之畢尤可為證本者乎／柳営亜槐〈判〉」（本文同筆）、実朝の略系図、公卿補任の抄出あり。前見返しに「貞享四年刊系統本／尾崎雅嘉自筆寫／昭和十七年初秋大阪ヨリ求／童馬山房主人」という斎藤茂吉（1882～1953）が尾崎雅嘉（1755～1827）筆と鑑定した識語が付される。たしかに、『百人一首一夕話　尾崎雅嘉自筆稿本』（臨川書店、1993 年）の書風に類似するが、雅嘉とは別筆か。蔵書印、1 オ右下に「可庵」（朱・陽・方・単。縦 1.4cm×横 1.2cm）。本文冒頭に「朱異本／墨　真淵本」と注記される。宝暦 5 年（1755）の序をもつ賀茂真淵書入本（15 参照）。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集 19 源実朝』岩波書店、1973 年）に紹介され、朱で校合された「異本」は「類従本」と指摘される。なお、斎藤茂吉旧蔵の『金槐集』は本学図書館と立教大学図書館にまとまって収められている。
『金槐集』は鎌倉幕府 3 代将軍の源実朝（1192～1219）の私家集。「金」は鎌倉の「鎌」の偏、槐は大臣の総称「三槐」にちなむ。実朝は初代将軍頼朝（1147～99）と北条政子（1157～1225）の子。幼少で将軍となったため、政子が政治的実権を握った。建保 7 年（1219）正月、任右大臣に伴う鶴岡八幡宮拝賀の際、頼家（1182～1204）の子公暁（1200～19）に暗殺された（参考 3 参照）。
実朝は若いころから和歌への関心が強く、藤原定家に師事した。『金槐集』は貞享 4 年（1687）に刊行された版本が流布したが、これは室町幕府 9 代将軍の足利義尚（1465～89）が編纂したもので（小川剛生「足利義尚の私家集蒐集とその伝来について」和歌文学研究 106、2013 年 6 月）、実朝の時代から 250 年以上も後のことであった。一方、昭和初期に実朝自身が定家へ贈ったと見られる本（定家所伝本。所収歌や配列が大きく異なる）が発見され、その系統の本文は群書類従に受け継がれていたことが判明した。
つまり、斎藤茂吉は当該資料が版本系の本文で、それを定家所伝本系の「類従本」で校合したと指摘したわけである。ただし、掲出部分の左端の詞書「屏風の絵に春日山･･･」の「春日」に朱で「霞の」と傍記があり、それが「異本」の本文であったことになる。しかし、群書類従および定家所伝本はいずれも「春日」で異同がない（16 参照）。したがって、「異本」は「類従本」系統であるものの、群書類従そのものではない。

15　金槐和歌集　袋綴 1 冊　〔江戸中期〕写　＊貞享 4 年（1687）版本系

登録番号、1168640。青の横刷毛目表紙。縦 26.5cm×横 18.6cm。外題、表紙中央の茶色題簽（縦 17.9cm×横 4.2cm）に「金槐集」と本文別筆で書写。内題、「金槐哥集巻上（巻之中・巻之下）」。尾題、「金槐哥集上之巻（巻の中）終」。巻下の尾題なし。見返し、共紙。料紙、楮紙。遊紙、前 1 丁、後 2 丁。毎半葉 11 行。和歌 1 行（詞書 3～4 字下げ）。字高、約 19.5cm。奥書なし。蔵書印なし。本文同筆の黒と朱の書入れあり。宝暦 5 年（1755）の賀茂真淵（1697～1769）書入本。江戸中期の国学者である真淵は実朝の歌を高く評価し、秀歌に「○」や「○○」などの点を加えたり、評を付けたりした。門弟らにもしばしば評語書入本を授けており、その序文や評語も推敲が重ねられていたことが、高松亮太「賀茂真淵の実朝

研究」（国語国文 84-6、2015 年 6 月）に指摘される。
　掲出したのは 14 と同じ春部。右から 3 首目の詞書はやはり「春日山」である。左から 3 首目は「うめの花をよめる」の詞書を受け、「我宿のいけ（他本「八重」）の紅梅さきにけりしるもしらぬもなべてとはなん」と詠まれる。朱の丸以下が真淵の評語で、「紅梅を字音にていはれしはよろしからねど、かゝ／はらぬ所に器量あり」と記される。和歌には大和言葉を用いるのが原則で、「こうばい」という「字音」を用いるのはよろしくないが、（そうした些細な点に）こだわらないところに才能があると弁護する。伝本によって「かうばいをぢをん／にてよみ給ふは／いかゞ」（宮城県図書館伊達文庫本 M911.14/キ 1）や「紅梅の字音を／用ゐまじきは／知つゝ、時にのぞ／みてかゝはり給はぬがをゝしきなり」（広島大学図書館本〈大国 41〉）のような相違が見られる（国書 DB の画像参照）。

16　金槐和歌集　袋綴 1 冊　〔江戸中期〕写　＊定家所伝本系

　登録番号、1294068。縹色無地表紙。縦 26.2cm×横 19.7cm。表紙左肩の雲母下絵題簽（縦 20.2cm×横 4.5cm）に「金槐集」と本文別筆で書写。前遊紙の左上に「金槐集　全　鎌倉右大臣實朝公家集」（本文同筆）。見返し、共紙。料紙、楮紙。遊紙、前 1 丁、後なし。毎半葉 9〜11 行。和歌 1 行（詞書 1〜5 字下げ）。字高、約 22.3cm。奥書なし。蔵書印、1 オ右下に「読杜／艸堂」（朱・陽・方・単。縦 1.6cm×横 1.6cm）、最終丁左上「知／鑑」（朱・陽・鼎・単。縦 2.9cm×横 2.5cm）、その下に「玄／誉」（朱・陽・方・単。縦 2.6cm×横 2.6cm）。
　掲出したのは 14・15 と同じく春部のはじめの方であるが、当該資料は定家所伝本系なので所収歌や配列が大きく異なっているのが分かる。なお、3 首目の詞書にはやはり「春日の山」とある。

Ⅳ　百人一首と古注釈

17　百人一首　綴葉装 1 帖　〔室町後期〕写　＊伝鳥飼宗清筆

　登録番号、1056909。灰色鉄線文様裂表紙。縦 20.3cm×横 14.9cm。外題なし。内題なし。見返し、共紙。料紙、楮紙。毎半葉、6 行。和歌 2 行（上句末で改行。下句は上句よりも若干下げて書写）。字高、約 17.7cm。3 括（枚数は 5・5・4（最初に別の 1 枚を糊付け）。最後の 1 丁のみ表紙に綴じ込む）。奥書なし。蔵書印、表紙右上と 1 オ右上に「峻斎／秘笈」（朱・陽・方・単。縦 2.6cm×横 2.6cm。表紙は捺印した紙片を糊付け）。1 オ右下に「残花書屋」（朱・陽・楕円・単。縦 4.6cm×横 1.7cm）。井狩源右エ門による極札、「鳥飼宗清〈秋の田の〉（印）」（縦 14.2cm×横 2.2cm）。印記「定」（黒・陽・方・単。縦 1.4cm×横 1.4cm）。見返しに糊付けされており、裏は見えない。
　『百人一首』は極めて著名な作品なので、伝本も非常に多く、いまだ整理の途上にある。そもそも、藤原定家が撰んだのは『百人秀歌』であり、後人がそれを改変したのが『百人一首』である（参考文献参照）。『百人秀歌』と『百人一首』は所収歌がわずかに異なる一方、配列は大きく異なっている。吉海直人「百人秀歌型配列の異本百人一首について」（和歌文学研究 61、1990 年 10 月）によると、『百人一首』の中には所収歌が『百人一首』と一致するにもかかわらず、配列は『百人秀歌』に一致するという伝本もある。
　当該資料は『百人一首』と所収歌が一致するものの、配列は通常の『百人一首』とも『百人秀歌』とも一致しない伝本である。すでに、久保木秀夫「『百人一首』『百人秀歌』の伝本と本文」（中川博夫ほか編『百人一首の現在』青簡舎、2022 年）は、62 清少納言が 89 式子内親王と 90 殷富門院大輔の間に配されていることを指摘している。ほかにも掲出箇所のように（40 兼盛・41 忠見・46 好忠・）44 朝忠・45 謙徳公・42 元輔・43 敦忠（・47 恵慶・48 重之）となっているほか、60 小式部内侍・59 赤染衛門、また 73 匡房・74 俊頼・71 経信・72 紀伊などとなっている。

【参考文献】

田渕句美子「『百人一首』の成立をめぐって―宇都宮氏への贈与という視点から」（江田郁夫編『中世宇都宮氏　一族の展開と信仰・文芸』戎光祥出版、2020 年）、同「小倉色紙と「嵯峨中院障子色紙形」―紙背と成立を中心に」（かがみ 50、2020 年 3 月）。

18　百人一首かるた　取札・読札、各 100 枚　〔江戸中期〕写

登録番号、1155112。縦 8.0cm×横 5.5cm。銀覆輪台紙。間合紙風の料紙に金霞引を施す。読札には奈良絵本を思わせる古雅な絵があり、取札は散らし書き。現代とは異なり、読札に上句のみしか書かないのは江戸時代に多い方式。帙・蒔絵箱入り。手書きのかるたは残存数が少なく、当該資料はその中でも古い例である。

『百人秀歌』と『百人一首』の相違点の 1 つに家隆の位階がある。『百人秀歌』では「正三位」となっている一方、『百人一首』では「従二位」となっている場合が多い。しかし、このかるたでは「正三位家隆」となっている。

19　貞信抄　袋綴 4 冊　〔江戸中期〕写　＊個人蔵

縹色無地表紙。縦 25.7cm×横 18.8cm。外題、表紙中央の双枠題簽（縦 17.7cm×横 4.1cm）に「百人一首抄　春（～冬）」と本文別筆で書写。内題、「貞信抄序（～巻之冬）」。尾題、「貞信抄之春（～冬）終」。見返し、共紙。料紙、楮紙（打紙）。遊紙、春・秋は前後各 1 丁。夏・冬は前 1 丁、後なし。毎半葉 10 行。和歌 1 行。字高、約 21.9cm。奥書、冬の末尾に「延文四年暮秋於于蛍窓下／頓阿記之」（本文同筆）。蔵書印、各冊末左下に「小松園」（朱・陽・方・単。縦 3.0cm×横 1.0cm）。作者名の上に朱の「〇」、和歌の始めに朱の「^」、注は和歌より 2 字下げ。俊頼の歌と注を欠く。

『百人一首』に関する言及が見られるのは南北朝時代の頓阿（1289～1372）からで、頓阿自身が『百人一首』の編纂に関与した可能性（小川剛生「『百人一首』の成立―いつ誰が撰したのか」中川博夫ほか編『百人一首の現在』青簡舎、2022 年）や古注を作成した可能性（井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』明治書院、改訂新版 1987 年）も指摘されている。

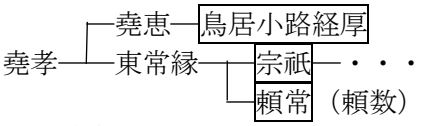
当該資料はその頓阿が延文 4 年（1359）に記したという奥書をもつ古注で、ほかに伝本が知られていない孤本である。もっとも、その本文のほとんどは九州大学文学部蔵『百人一首諺解』に「頓公云」として引用されており、従来から知られていた（『百人一首注釈書叢刊 14　百人一首諺解　百人一首師説秘伝』和泉書院、1995 年。今西祐一郎氏・福田智子氏担当）。当該資料には『百人一首諺解』に引かれていない文章も散見する。ただし、注の内容を見ると、いわゆるテニヲハに関する言及が目立つほか、切紙などを用いた秘伝的な要素もあるなど、頓阿の時代に成立したとは思えない。頓阿に仮託された古注と見るべきであろう。

掲出したのは冒頭の序文に続く「百人一首の趣興」と題する部分。この題は『百人一首諺解』になく、直後の「千早振神かたはとをし。天智聖武の間になり宇田醍醐の時代にさだまれり」も見えない。また、この前後の文章は引用の順序にも相違がある。ここでは「貞信抄」の名の由来が語られる。定家の「自筆の百人一首」の巻末に「おもはれぬ物とはなしに小倉山の軒端の松ぞなれて久しき」（『諺解』は「小倉山」「松に」）とあり、貞信公の「小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ」を意識した歌であるから、それにちなんだという。ただし、この定家詠は『拾遺愚草』（権大納言家三十首・山家松・2082）に初句「忍ばれん」、3 句「小倉山」として見え、『風雅集』（雑中・1744）にも「卅首歌の中に、山家松」として『拾遺愚草』と同じ形で入集する。

20　愚問賢注抄　袋綴 1 冊　玉翁筆　享保 8 年（1723）写　＊紅梅文庫旧蔵

登録番号、1253280。紺色無地表紙。縦 26.9cm×横 18.9cm。表紙中央の下絵題簽（縦 17.5cm×横 3.7cm）に「愚問賢注抄」と書写。内題なし。見返し、共紙。料紙、斐楮交漉。遊紙なし。毎半葉、小字の講釈のみの場合は 14 行、『愚問賢注』本文がある場合は 10 行。字高、23.8cm、『愚問賢注』本文は 14.8cm。識語、巻末に「于時享保八〈癸／卯〉年菊月吉辰／阿陽三谷山人／中村氏風青堂／玉翁書之／墨付四十五枚」（本文同筆）。蔵書印、1 オ右下に「紅梅／文庫」（朱・陽・方・単。縦 2.2cm×横 2.2cm）。

頓阿が『百人一首』と深く関わっていることは確実であるが、けっきょく頓阿が自ら著述した古注などは現存しない。しかし、現存する『百人一首』古注の古いものは頓阿の流れを汲んだものである。頓阿―経賢―堯尋―堯孝と二条派の歌学が受け継がれ、堯孝以降は次ページのように広がる（川上一「百人一首の古注釈―宗祇抄を軸に」中川博夫ほか編『百人一首の現在』青簡舎、2022 年）。四角で囲んだのが古注の現存する者（なお、堯恵については 7 月 22 日の日本文学会における伊倉史人「堯恵の『百人一首』注釈」に取り上げられる）。



当該資料は頓阿が二条良基（1320～88）の質問に答えた『愚問賢注』について、堯孝（1391～1455）が講釈し、堯恵（1430～1498）が聞書したもの。掲出したのは歌題の詠み方に関する部分。上段の小字が堯孝の講釈、下段の大きい字が『愚問賢注』の本文で、良基の質問に続き、2 字下げで記されるのが頓阿の回答。右の丁の上段、堯孝の講釈の 2 行目から「結題」（複数の要素を組み合わせた歌題）の詠み方を説明する。たとえば、題に「径」とある場合（12 に「野径雪」題）は「大道」などは詠まず、「そとしたる道」「道のおもかげばかり」を詠むべきで、『源氏物語』の「蓬生」巻にも「三の径」とある（参考 2 参照）。また、「寄月」（09 に「寄月祝」題）と「月前」という題では詠み方が変わり、前者は「月」さえ詠めば、1 首の内容は恋でも旅でもよいが、後者は「月」を 1 首の主役にすべきで、沈んだ後の月や「雨夜の月」は詠むべきでない。さらに、「海辺」と「浦」（11 に「海辺月」・「浦月」題）も、前者は「磯」や「渚」などと詠んでもよいが、後者は名所以外「浦」と詠むべきだ、という。

参考 1　新古今和歌集（断簡）　2 葉（軸装・台紙貼）　1 軸（巻子改装。もとは綴葉装。巻 19 存）
〔鎌倉中期〕写　＊伝後京極良経筆　＊桂切

1941 年、『新古今集』巻 16 の残欠本が京都の桂で分割され、「桂切」と名付けられた。桂切は特殊な本文を持っている場合があり、朱で他本の異文も注記されている。書写年代も古いことから、『新古今集』の伝本研究上、注目される。さらに、巻 16 以外も伝存しているようで、たとえば本学図書館には巻 19 が 1 巻分所蔵されている。

〔軸装〕

登録番号、1339529。縦 23.9cm×横 14.2cm。巻 16 の 1487 詞書後半～1489 詞書前半。9 行。料紙、斐紙。和歌 2 行（上句末で改行。詞書 1～2 字下げ）。字高、約 21.0cm。2 首目の詞書は『新編国歌大観』では「返し」、3 句目「みよなれど」は「みよなれば」となっている。

〔台紙貼〕

登録番号、1434857。縦 24.5cm×横 15.2cm。巻 16 の 1474 詞書～1476 上句。9 行。料紙、斐紙。和歌 2 行（上句末で改行。詞書 2 字下げ）。字高、約 20.5cm。古筆了信による極札あり。表「後京極殿良経公　白浪の（琴／山）」。裏「名葉桂切　新古今集第十六雑之部哥　一表／辛巳四（了信）」（裏は銀揉箔散らし）。2 首目の 4 句目「まつのこま」は傍記の「くま」が、3 首目の 2 句目「よしのゝやま」も傍記の「をく」が『新編国歌大観』と一致する。

〔巻子装〕

登録番号、1370854。縦 24.5cm×横 474cm。綴葉装（半葉の横の長さは約 15.0cm）を改装した巻子装。全部で 15 丁と半葉が継がれている。巻 19 神祇部が完存。後補浮線綾散らし裂表紙。見返し、金霞引き。内題、和歌と同じ高さから「新古今和謌集巻第十九」と書き、改行して詞書・左注と同じ高さから「神祇哥」と書写。料紙、斐紙。和歌 2 行（上句末で改行。詞書・左注ともに 2 字下げ）。字高、約 21.3cm。所収歌は国立歴史民俗博物館蔵伝藤原為相筆本と同様で、『新編国歌大観』1994 の切出歌を本文中に含む（切出を示す記号はない）。朱の他本注記あり。朝倉茂入（道順）による極札、「九条殿摂政良経公〈後京極殿御事／新古今和哥巻第十九〉（印）」（縦 17.9cm×横 1.7cm。本文冒頭の余白に糊付け）。印、黒・陽・方・単、縦 1.2cm×横 1.2cm。

掲出したのは巻頭から延喜 6 年（906）の日本紀竟宴和歌までの部分。日本紀竟宴和歌は『日本書紀』の講書が終わった後の宴席で、『日本書紀』に見える神名などを題として詠んだ歌。『新古今集』では 3 首続くが、歌題と和歌の組み合わせが不審。神武天皇を題とする 1 首目は玉依姫を詠み、玉依姫を題とする 3 首目は神武天皇を詠んでいる。同じように誤る古写本も少なくなく、編纂時の錯誤かと推測されてきた。今回、桂切も同様と確認されたわけである。なお、桂切には 1 首目の詞書の冒頭に朱で「〇―」という記号があるが、これは同じ高さで書かれている前歌の左注と区別するためか。詞書の「神ゝ日本盤余彦天皇」は神武天皇のことだが、通常は「神日本磐余彦天皇」と記す。また、初句「しら浪の」の「の」に朱で「に」と傍記、下句「なぎさやつゐにとまりなるらん」の「るらん」に朱で「りけん」と傍記する。『新編国歌大観』は傍記に一致し、4 句の末尾は「つひの」である。久保田淳『新古今和歌集全注釈』（角川学芸出版、2011～2 年）によると、桂切の本行本文と一致する伝本に東京大学附属図書館蔵伝橋本公夏筆本（久保田淳『新古今和歌集全評釈』講談社、1976～7 年の底本）がある。

参考 2　源氏物語　綴葉装 54 帖　〔江戸前・中期〕写　＊久保田淳氏寄贈

登録番号、1373237~90。紺色地銀切箔・野毛・砂子散らし秋草下絵表紙。縦 23.8cm×横 16.8cm。外題、表紙中央の金布目地題簽（縦 16.0cm×横 3.0cm）に「桐壺　一（～夢のうきはし　五十四〈大尾〉）」と本文別筆で書写。内題なし。見返し、金切箔散らし斐紙。料紙、間合紙風の柔らかい斐紙。遊紙、前 1 丁、後は巻により異なる。毎半葉 10 行。和歌は改行 2 字下げで書きはじめ、末尾は地の文へ続く。字高、約 19.0cm。奥書なし。蔵書印なし。本文は青表紙本系統と見られる。巻により、黒や朱の書入れがあり、注意される。

掲出したのは夕顔（上段）、蓬生（下段右）、明石（下段中央）、真木柱（下段左）。夕顔巻は左の丁の 3 行目「をちかた人に物申」と源氏が独り言を言うと、随身が「かのしろくさける／をなん夕がほと申侍る」と答えたことで、源氏は花の名を知った。それを踏まえたのが 10 の小侍従の歌。

蓬生巻の左の丁の後ろから 5 行目には「みつのみちとたどる」とあり、朱で「三径」と傍記される。これは 20 で言及される場面。

明石巻や真木柱巻にはそれぞれ書入れが見える。このような書入れがほかの巻にも散見する。

参考 3　実朝暗殺　原稿用紙 6 枚　永井路子氏自筆

源実朝は建保 7 年（1219）の鶴岡八幡宮拝賀の際、兄で 2 代将軍であった頼家の子の公暁に暗殺される。公暁は同時に源仲章をも殺すが、真の標的は北条義時であった。義時はこの直前、体調不良を訴え、剣を持つ役を仲章に譲り、自宅へ帰っていたのである。けっきょく、公暁は三浦義村の配下に討ち取られ、源氏将軍の血は断絶した。事件の黒幕としては、古くから義時が想定されていた。成長するにつれて北条氏の言いなりにならなくなった実朝を、義時が公暁に殺させたという見方である。

しかし、永井路子氏（1925～2023）は小説『炎環』（光風社、1964 年）の中で、義時黒幕説に疑問を呈し、公暁の乳母の一族であり、北条氏とは政治的に対立していた三浦氏に着目し、三浦義村こそが黒幕ではないかとの見方を示した。そもそも、公暁は義時を殺そうとして、誤って仲章を襲ったのであり、義時と公暁が通じていたとは考えにくい。むしろ、公暁に近い三浦氏が、将軍と義時を一気に排そうとしたものの、義時の殺害に失敗し、三浦氏は公暁を討つことで自らの保身を図ったという説である。『炎環』は直木賞を受賞しただけでなく、義村黒幕説は学界にも大きな影響を与え、これを支持する研究者も少なくない。その後も、永井氏は『つわものの賦』（文藝春秋、1978 年）などで鎌倉幕府や将軍の盛衰を描き、それらは大河ドラマ「草燃える」の原作ともなった。ほかにも天平から明治に至るまでさまざまな時代のさまざまな人々を描き、それらは『永井路子歴史小説全集』（中央公論社、1994～6 年）全 17 巻にまとめられている。

当該資料は、長洲一二ほか『かながわの史話 100 選　上』（神奈川合同出版（かもめ文庫）、1985 年）に掲載された「実朝暗殺」の自筆原稿である。400 字詰め原稿用紙 6 枚（書籍では 5 ページ分）にペンで書かれている。藤原氏が天皇の権威を背景に勢力を拡大したように、北条氏にとっても実朝は権威であり「宝」であったと指摘し、従来説を批判する。

凡 例

1. 書目一覧は、原則として書名、刊写年、伝称筆者の順で記し、特記事項は「＊」以降にまとめた。
2. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
3. 蔵書印などは印記を記した後、色・陽刻と陰刻の別・形状・枠について記し、大きさを示した。
4. 推定記載は〔　〕、小字は〈　〉に括り、2 字以上の踊字は「／＼」、改行は「／」または「/」とし、適宜、濁点と句読点を付した。
5. 『源氏物語』の巻名は通行の表記に統一した。例）「もみぢの賀」→「紅葉賀」
6. 漢字は通行の字体に統一した。
7. 古典本文の引用は断らない限り『新編日本古典文学全集』により、表記は改めた。
8. 解題執筆の際には、本学で開催された過去の展示解題のほか、以下の展示図録を参照した。

・『藝林拾葉 鶴見大学図書館新築記念貴重書図録』（1986 年）
・『大学院文学研究科開設記念 鶴見大学図書館蔵貴重書展目録』（1989 年）
・『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』（1994 年）
・『学校法人総持学園創立 80 周年記念和歌と物語 鶴見大学図書館蔵貴重書 80 選』（2004 年）

展 示 担 当

表紙（ポスター）：伊倉史人（ドキュメンテーション学科）
解題：田口暢之（日本文学科）

なお、参考 2 の『源氏物語』の本文調査には、瀬戸山優大（博士前期課程 2 年）、渋谷ふたば（博士前期課程 1 年）、堀萌笑（同上）の 3 氏の協力を得た。

第 158 回　鶴見大学図書館 貴重書展

中世の歌業
── 勅撰集、実朝、百人一首 ──

発行日 : 2023 年 7 月 15 日
編集・発行 : 鶴見大学図書館
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2 丁目 1 - 3